

聖書日課 『からし種』 2023.6.4-6.11

<p>6月4日 (日) II 列王 2章</p>	<p>「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません」(2節)。エリシャは牛を引いて畑を耕している時にエリヤに見出され、油を注がれて後継の預言者となって最後までエリヤを離れず従い続けた。エリヤの中に「生きて働かれる主を見た」のだろう。お互いの間に「生きて働かれる主を見る」教会の交わりとなることができるように。</p>
<p>5日 (月) II 列王 3章</p>	<p>「ヨシャファトは、『彼(エリシャ)には主の言葉があります』と言った」(12節)。歴代誌下 18 章には、常に「主の言葉」を求めたヨシャファト王の姿が記されている。ヨシャファトは、王に耳触りの良い言葉を告げる「御用預言者」ではなく、真摯に神の御旨を尋ねてまっすぐに語る「真の預言者」を求めたのである。今日、「主の言葉」を求めて祈る信仰を与えてください。</p>
<p>6日 (火) II 列王 4章</p>	<p>「エリシャは、『あなたの子を受け取りなさい』と言った」(36節)。愛息が自分の腕の中で突然息を引き取った時、シュネムの婦人は決然とカルメル山のエリシャのもとに向かった。何も言わずにエリシャの足にすがりつく彼女の背中から慟哭の深さが伝わってくる。しかし大切な命を失った時が、主の慈しみと出会う機会に変えられていく。主の御名はほむべきかな。</p>
<p>7日 (水) II 列王 5章</p>	<p>「僕は今後、主以外の他の神々に焼き尽くす献げ物やその他のいけにえをささげることはしません」(17節)。アラムの將軍ナアマンをエリシャのもとに導いたのはイスラエルの捕虜の少女であり、エリシャの言葉に憤ったナアマンをなだめてヨルダン川に行かせたのは家来たちだった。ナアマンが真の主なる神と出会うために背後でささげられた幾人もの祈りを想う。</p>

聖書日課 『からし種』 2023.6.4-6.11

<p>8日 (木)</p> <p>Ⅱ 列王 6章</p>	<p>「するとエリシャは…主に祈り、『主よ、彼の目を開いて見えるようにしてください』と願った」(16-17節)。アラムの大軍を目の前にした召し使いは悲鳴を上げた。しかしエリシャの祈りによって召し使いは「山に満ちている火の馬と戦車」を見る者とされた。目に見えるものに一喜一憂するのではなく、主の慈しみと守りを信頼する信仰をいただくことができるように。</p>
<p>9日 (金)</p> <p>Ⅱ 列王 7章</p>	<p>「重い皮膚病を患っているものたちは…互いに言い合った。『わたしたちはこのようなことをしてはならない』」(8-9節)。重い病の四人はふだん町の人々から冷たい視線を浴びていながら、飢餓に苦しむ同胞のために自分たちがすべきことに立ち上がっていった。自分の腹が満たされることだけを求めるのではなく、他者と命を分かち合う心をいただけるように。</p>
<p>10日 (土)</p> <p>Ⅱ 列王 8章</p>	<p>「神の人が死人を生き返らせたことをゲハジが王に語り聞かせていると、ちょうどそのとき…」(5節)。主が「ちょうどそのとき」を用いられるタイミングの絶妙さに感嘆させられる。王が「神の人の話を聞きたい」と思った「とき」と、飢饉を逃れた婦人がペリシテから戻ってきた「とき」を主は用いたもう。今日わたしの思い計る「とき」でなく、主の「とき」が成りますように。</p>
<p>11日 (日)</p> <p>Ⅱ 列王 9章</p>	<p>「油の壺を取って彼の頭に注いで言いなさい。『主はこう言われる。わたしはあなたに油を注ぎ、あなたをイスラエルの王とする』と。そして戸を開けて逃げて来なさい」(3節)。預言者エリシャに仕える若者が受けたとんでもない使命。神の代理者として將軍を王に任命し、すっ飛んで逃げる。「狂った男」のように召命を果たした彼の必死さがイスラエルを動かした。</p>